

キャリア体験学習（国際・台湾）から考える
グローバルキャリア：2020～2023年度の国
内代替体験学習と海外現地体験学習を中心に

KURIYAMA, Yuko / 栗山, 有子

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Lifelong Learning and Career Studies / 法政大
学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

21

(開始ページ / Start Page)

75

(終了ページ / End Page)

108

(発行年 / Year)

2024-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030840>

キャリア体験学習（国際・台湾）から 考えるグローバルキャリア

—— 2020～2023 年度の国内代替体験学習と
海外現地体験学習を中心に ——

法政大学キャリアデザイン学部 キャリアアドバイザー 栗山 有子

はじめに

キャリア体験学習（国際・台湾）は、日本と関係が深い台湾を事例として、グローバルな視野からキャリアデザインを検討することを目的¹としたキャリアデザイン学部選択必修（体験型）科目の1つである。当初、春学期の事前指導を踏まえ、8月に2週間、台湾において大学生との交流、法政大学台湾校友会の人々と意見交換、企業訪問やインターンシップなどを行い、体験学習で学んだことを秋学期で振り返り検討するプログラムとなっていた。

筆者は、2020年度から2023年度の間、この授業のキャリアアドバイザーを担当し、新型コロナウイルス感染症の感染拡大による行動制限で、海外現地体験学習が中止となった2020年度から2022年度の3年間の日本国内代替体験学習と、同感染症の位置づけが5類²に移行し台湾での現地体験学習が再開した2023年度の授業支援を行った。国内代替体験学習では、履修する学生に台湾での現地体験学習に劣らない経験をしてもらうためのプログラムを模索し、4年ぶりとなった海外現地体験学習では、関係者と共に一からプログラムを作る苦労も経験した。

本稿では、国内代替体験学習と海外現地体験学習についての実践と学生の変容を記録するとともに、学生がキャリア体験学習（国際・台湾）を通して、グローバルなキャリアについて理解することができたのかどうか考察する。

1. グローバルキャリアの枠組みとキャリア体験学習（国際・台湾）の概要

1-1 グローバルキャリアの枠組み

グローバルキャリアとは何か。友松（2012）は、グローバル化が進展する社会では、グローバル人材が存在すると指摘³し、経済産業省・文部科学省合同委員会が定義した「主体的に考え、多様な人々に自分の考えをわかりやすく伝え、文化的・歴史的なバックグラウンドに由来する価値観や特性の差を乗り越え、相手を理解しそれぞれの強みを引き出して活用し、新しい価値を生み出すことができる人材（要約）」という本質的な要件を紹介している⁴。

本稿での視点は、文部科学省が「グローバル人材の育成について」⁵の中で整理した概念に基づき、①語学力・コミュニケーション力、②主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性と柔軟性、責任感・使命感、③異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティの理解、という3つの要素に焦点を当て、グローバル人材に必要な要素をどの程度培うことができたのか、国内代替体験学習と海外現地体験学習という2つのタイプの体験学習を通して分析していきたい。

1-2 キャリア体験学習（国際・台湾）の概要

キャリア体験学習（国際・台湾）は、2018年度に始まり2019年度までの2年間は台湾で14日間の現地体験学習を行った⁶。2020～2022年度の3年間は、新型コロナウイルス感染症の影響により海外現地体験学習は中止となり国内代替体験学習となったが、同感染症の5類移行により2023年度から海外現地体験学習が再開した。

このプログラムは、松尾（2020）が春学期事前指導、体験学習、秋学期事後指導という通年のカリキュラムを作成し⁷、プログラム全般のコーディネイト業務を日本台湾教育センター⁸に委託した。授業の実施は、キャリアデザイン学部専任教授⁹と同センター日本事務所所長で台湾人女性の郭艶娜兼任講師が共に担当している。

1-2-1 国内代替体験学習

国内代替体験学習の概要を説明すると、春学期・事前指導の中では、①地理・歴史、社会・文化、政治・経済、台湾人のアイデンティティなど台湾事情の学習

と中国語学習を行う。②国内代替体験学習は、(1) オンラインで学生交流や台湾校友会と意見交換 (2) オンラインで企業インターンシップ (3) 国内フィールドワークという3つのパターンで行う。秋学期・事後指導では「体験の言語化」として③ポスター・報告書を作成し、台湾についての理解がいかに深まったのか、台湾の人々と積極的に交流ができたのか、多文化共生について醸成できたのかを把握する。

国内代替体験学習の流れ

- ① 台湾事情、中国語の学習 → ② 国内代替体験学習 → ③ ポスター・報告書の作成
- (1) オンライン交流（元智大学、台湾校友会）
 - (2) オンライン企業インターンシップ
 - (3) 校外フィールドワーク（東京・横浜・台湾フェス）

1-2-2 海外現地体験学習

海外現地体験学習の概要を説明すると、春学期・事前指導の中では、①地理・歴史、社会・文化、政治・経済、台湾人のアイデンティティなど台湾事情の学習と中国語学習を行い、現地体験学習に向けてしおりを作成する。8月に行う②グローバル体験学習では、元智大学の学生交流や台湾校友会との意見交換、台中・台南へ2泊3日のフィールドワークで史跡見学や企業訪問、台北で企業インターンシップと成果報告会という4つの活動を行う。秋学期・事後指導では「体験の言語化」として③ポスター・報告書を作成し、台湾についての理解がいかに深まったのか、台湾の人々と積極的に交流ができたのか、多文化共生について醸成できたのかを把握する。

海外現地体験学習の流れ

- ① 台湾事情、中国語の学習 → ② 海外現地体験学習 → ③ ポスター・報告書の作成しおり作成
- (1) 元智大学との学生交流
 - (2) 法政校友会会員との意見交換会
 - (3) 台南・台中フィールドワーク（史跡見学・企業訪問）
 - (4) 企業インターンシップ、成果報告会

1－3 受講学生者数の推移

このプログラムはキャリアデザイン学部独自の海外研修制度の一つであり、定員は 10 名で希望者多数の場合は学部内の選考がある。2018～2023 年度までに受講した学生数は表 1 のとおりである。

表 1 受講した学生数

年度	募集人数	受講人数	備 考
2018	10	10	
2019	10	10	
2020	10	8	海外現地体験学習中止
2021	10	7	海外現地体験学習中止
2022	10	8	海外現地体験学習中止
2023	10	10	

プログラム開始の 2018 年度からの 2 年間と、海外現地体験学習が再開した 2023 年度は定員を上回る応募があり選考が行われた。しかし、国内代替体験学習の 2020～2022 年度の 3 年間の受講人数は定員に達せず、二次、三次募集をして確定した。つまり、このキャリア体験学習は、海外の現地で体験学習ができることに大きな魅力があり、現地に行けないのであれば希望しない学生が多かったことが窺える。

2. 国内代替体験学習について

2－1 2020～2022 年度の国内代替体験学習

2020～2022 年度の国内代替実習は、春学期・事前指導の中で①地理・歴史、社会・文化、政治・経済、台湾人のアイデンティティなど台湾事情の学習と中国語会話の学習を行い、②国内代替体験として（1）国内フィールドワーク （2）オンラインによる学生交流や台湾校友会の方々と意見交換 （3）オンラインによる企業インターンシップを行った。秋学期・事後指導で「体験の言語化」として③ポスター・報告書を作成し、台湾についての理解がいかに深まったのか、台湾の人々と積極的に交流ができたのか、多文化共生の態度をどのくらい醸成できたの

かを把握した。

これらは通常授業内で実施された。この期間は新型コロナウイルスの感染状況とその警戒レベルに影響され、授業そのものがオンライン形式（以下、オンライン授業という。）と対面形式（以下、対面授業という。）の2通りの方法で行われた。

2020年度は、4月7日に緊急事態宣言¹⁰が発出されたため授業開始が2週間程度遅れた。春学期の授業回数全12回すべてがオンライン授業となり、秋学期全14回のうち、オンライン授業8回、対面授業5回、校外フィールドワーク1回であった。

2021年度は、春学期全14回のうち、オンライン授業5回、対面授業8回、校外フィールドワーク1回で、秋学期全14回のうち、オンライン授業2回、対面授業11回、校外フィールドワーク1回であった。

2022年度は、春学期、秋学期とも全て対面授業が可能となり、春学期と秋学期に1回ずつ校外フィールドワークを行ったほか、夏休み期間中に「台湾交流フェス」のインターンシップに参加した。

このように、国内代替体験学習ではオンライン授業と対面授業とを適宜組み合わせる工夫が求められた。オンライン授業はZoomを利用し、出席者には顔の表情が認識できるよう、なるべくビデオをオンにした参加を求めた。初めに通信環境の確認、キャリアアドバイザーによるアイスブレイクを行い、台湾事情の学習については、学生が作成したスライドを画面共有し、プレゼンや質疑応答に教員がコメントをした。また、中国語学習や報告書・ポスター製作などのグループワークや学生交流はブレイクアウトルームを利用した。開始当時は通信環境が不安定で接続が中断される学生が続出し、キャリアアドバイザーは、補助的にLINEのトークやビデオ通話を利用し教員と連絡を取りながら学生をフォローした。

2-2 3つのパターンの国内代替体験学習

国内代替体験学習の内容は、「オンラインによる交流」「オンラインによる企業インターンシップ」「校外フィールドワーク」の3つのパターンに大別できる。

2-2-1 オンラインによる交流

台湾現地の人々と Zoom や GoogleMeet などを用いオンラインで接続し、元智大学、台湾校友会との交流や台湾企業のインターンシップを行った。

(1) 元智大学との交流

2020 年、2021 年度の春学期、2022 年度秋学期に 1 回ずつ 3 回に渡って、元智大学応用外国語学科呉翠華先生から Zoom で、日本への留学経験や台湾人としてのアイデンティティをテーマにご講話をいただいた。流暢な日本語と温厚な人柄の呉先生に多くの学生が質問すると、先生は一つ一つ丁寧に答えてくださった。

また同大学の応用外国語学科日本語コースの学生たちとの交流は、2020～2022 年度まで毎年春学期に行われた。2020 年度は学生が個別にオンラインで参加し、2021～2022 年度は、双方の大学が対面授業となった教室のプロジェクトに映し出す方法で行われた。その他、学生を 4 グループに分け、LINE や Facebook などのソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS) を利用して、各々の日常生活やグループごとに作成した大学紹介動画を発信し、授業以外にも交流を推奨した。台湾の学生は日本語能力が高く活発な交流ができた。中国語を話す留学生や中国語学習に熱心な学生は中国語で、それ以外の学生も翻訳アプリを駆使して、日本語と中国語の両方を使いながら積極的な交流を行った。

(2) 台湾校友会との交流

2020 年度春学期、2021 年度春学期、2022 年度秋学期にそれぞれ 1 回ずつ、3 回に渡って台湾校友会の呂銀坤氏から Zoom で、法政大学留学当時の思い出、日本に就職した会社員時代の経験、台湾で会社経営する現在までのライフストーリーと、後輩たちへのメッセージをご講話いただいた。2021 年度に日本政府が台湾にワクチンを送った際には、呂氏から「御礼メッセージ動画」が送られた。呂氏の会社の正面玄関に社員全員が並び、カメラに向かって「ワクチンをありがとうございます。」と日本語で唱和し深々とお辞儀する映像に学生たちは深く感動していた。

2-2-2 オンラインによる企業インターンシップ

Zoom により会社説明や質疑応答を実施した企業は、2020～2021 年度は毎年 3 社（所）、2022 年度は 2 社（所）であった。オンライン授業の 1 コマに 1 社ずつ、日本人担当者や日本語のできる台湾人から、プロモーションビデオや写真などを画面共有し、説明していただいた。学生は事前に当該企業を調べ、雇用情勢や社員の働き方、日本と台湾を跨いで活躍する担当者のキャリアデザインなどに質疑応答するスタイルをとった。ご協力いただいた企業は、以下のとおりである。

オンラインインターンシップ先の台湾企業

・2020～2021 年度

日立先端科技股份有限公司（日立ハイテク） 担当者：根本正道氏、陳玫方氏、陳皓仁氏
半導体や電気などの開発、製造、販売をグローバルに事業展開している企業

Ponddy Education 担当者：スチーブン・スー氏

人工知能（AI）を用いて、中国語と英語の言語学習製品やサービスを提供する事業を展開している企業

茨城県笠間市役所台湾交流事務所 担当者：木下知香氏

茨城県笠間市と台湾の交流のために開設された現地事務所

・2022 年度

茨城県笠間市役所台湾交流事務所 担当者：木下知香氏

茨城県笠間市と台湾の交流のために開設された現地事務所

石峰印刷品有限公司 担当者：石原武峰氏

台湾と日本の幅広い分野で広告、デザイン、印刷等全般を展開する企業

これらは 2018～2019 年度現地体験学習のインターンシップ受入れ企業が多く、当時、5 日間のインターンシップに参加した先輩学生たちが経験した様子を例に、分かりやすくイメージできる説明であった。2020 年度のオンラインインターンシップでは、2019 年度に現地で参加した先輩学生が、1 社あたり 1～2 名参加した。彼らは担当者と Zoom での画面越しの再会を喜び、言葉や文化の違う職場での失敗談などを具体的に語り、受講した学生たちと活発な意見交換が行われた。

2-2-3 校外フィールドワーク

対面授業が可能となった 2020 年度秋学期以降は、日本国内で「台湾を見つける」ことをテーマに、東京と横浜でフィールドワークを行った。2022 年度はこれらに加え夏休みにインターンシップを行った。

以下、代表的なスケジュールを例に、内容について説明したい。

(1) 東京フィールドワークの概要

2022 年 7 月 4 日に、東京で台湾を探すフィールドワークを実施した内容は、以下のとおりである。

東京で台湾を探すフィールドワーク

9:55 集合	台北駐日経済文化代表處正門
10:00～11:00	台北駐日経済文化代表處
11:00～11:20	移動
11:30～12:30	台湾料理店「新台北」
12:30～13:00	台湾観光協会東京事務所
	移動（徒歩）
13:30～14:30	台湾文化センター
	移動
15:00～16:00	誠品生活日本橋（COREDO 室町テラス）
16:00 ごろ	解散

台北駐日経済文化代表處を見学した後、台湾料理の昼食をとり、台湾観光協会や台湾文化センター、誠品生活日本橋を訪問した。

台北駐日経済文化代表處は、台湾と日本の外交窓口となる機関で、他国でいう大使館や領事館の役割をしている。領事部、經濟部、教育部、広報部と後述する台湾文化センターがある。2020 年度の訪問では感染対策のために屋内に立ち入ることはできなかったが、教育部長の黄冠超氏が玄関先で学生に概要を説明してくださった。2021～2022 年度は施設内に入ることができ、玄関ホールの孫



屋外で説明する黄教育部長（2020 年度）

文像や、ビザ発給執務室も見学できた。学生たちのなかには「大使館のような場所で、授業で学んだ台湾と中国、日本の歴史と結びつき、初めて事実として実感できた。」（2022 年度学生 A）と感想を述べる者もいた。

台湾観光協会東京事務所は、日本の国土交通省にあたる台湾交通部観光局が管轄する駐在事務所で、日本における台湾観光促進事業の窓口である。クオリティの高い資料や雑誌が陳列されていた。

台湾料理店「新台北」は、台湾観光協会東京事務所に隣接するビル内にある台湾の家庭料理店で、素材や調理方法、台湾の食文化について説明を受けながら昼食をとった。

台湾文化センターは、台湾と日本の文化交流のプラットフォームの役割を果たし、台湾の芸術や文化関連団体と内容を広く紹介し国際的な文化交流を図っている。コロナ禍であっても台湾と日本の文化のつながりを止めない工夫と取り組みがされていた。

誠品生活日本橋は、台湾カルチャー大型店舗で書籍、文具、雑貨、食品など台湾企業「誠品生活」の商品が説明付きで紹介陳列されており、各々台湾物産品の購入を楽しんだ。

この他、2020 年度には、台湾のボランティア団体台湾慈濟日本分会を訪問した。同会は東日本大震災時の復興支援で活動した団体で、医療、教育、社会文化、被災地復興などの幅広い支援を行っており、高齢者施設訪問や炊き出し、若者の奨学金支援などの活動例を知ることができた。2021 年度には、東京タワー「台湾祭 2020」イベントに参加した。そこではスタッフとして働いていた航空会社客室乗務員から「コロナで飛行機が運航していないために、非正規雇用であちこちのイベント会場で働いている」というコロナ禍の実情を伺うことができた。

いずれも、自粛生活を続ける学生たちにとって、台湾に関わる多くの人々と接することができた好機会であった。

（2）横浜フィールドワークの概要

2022 年 11 月 21 日に横浜でフィールドワークを実施した内容は、以下のとおりである。

横浜フィールドワーク

8:15	集合（横浜中華学院正門）
8:30	横浜中華学院 校長挨拶 法政大学教授挨拶、関係者紹介
8:45～9:15	・国語課授業見学（小1年 仁・愛組教室） ・学校説明・校舎見学 2階～6階
9:40～10:25	・中華学院教員による講義 テーマ「中華学院をベースに台湾の文化・教育について」
10:35～11:20	・中華学院高校2年生と交流会 法政大学キャリアデザイン学部の案内 グループワーク テーマ「多文化共生」
11:30	まとめ 移動（徒歩）
12:00～	中山記念堂・關帝廟・媽祖廟・牌楼・横浜中華街見学
14:00 ごろ	解散



横浜中華学院の高校生との集合写真（2022年度）

最初に、横浜中華学院を訪問し見学をするとともに、同校の生徒との交流を行った。その後、中山記念堂・關帝廟・媽祖廟・牌楼・横浜中華街を見学した。

横浜中華学院は、中国語を学び中華文化を伝承することを目的とした華僑のための学校（小・中・高校までの一貫教育）で、孫文が1897年に日本初の華僑学校として設立した。当日は同校の杜文剣校長から説明を受けた後、小学1年生2ク

ラスにおいて国語教育の授業参観、校舎内施設、台湾伝統文化獅子舞の道具などを見学した。高校生との交流では、法政大学キャリアデザイン学部について紹介し、その後、4人ずつのグループに分かれ、多文化共生をテーマに意見交換が行われた。横浜中華学院の生徒は、中国、台湾など国籍もさまざま、華僑学校では中華圏だけでなく日本人の子どもたちもそれぞれのルーツを大切にしながら学んでおり、「多文化共生の意味を新鮮に受け止めた。」（2022年度学生B）と感想を語る学生もいた。グループワークでは意欲的な高校生からキャリアデザインに関する質問が多く出され、学生たちは各々、学部の学びや自身の大学生活を振り返る好機会となった。

横浜中華学院の斜向かいに位置する中山記念堂は、孫文が日本に亡命していた時の事務所である。その外観を見学した後、三国志の関帝が祀られている横浜関帝廟、道教の神を祀る媽祖廟（横浜大天后宮）、そして、横浜中華街で暮らす人々の様子を視察した。なお、2020年度の横浜フィールドワークは台風の影響で中止となった。

（3）夏休みインターンシップの概要

2022年8月29日の「台湾友好フェス」では、学生スタッフとしてインターンシップを行った。「台湾友好フェス」は台湾との友好事業で、台湾総領事を招待して太鼓演奏のほか、日本に暮らす台湾人が台湾原住民の踊りや歌謡など台湾文化を披露するイベントである。学生は大田区の職員や台湾の関係者と共に2人1組になり、会場の設営や資材の運搬、リハーサル準備、受付業務、接待や会場案内に当たった。

「台湾友好フェス」インターンシップ

日時：2022年8月28日（日） 午前10時集合

場所：東京都大田区新蒲田1丁目18-23 カムカム新蒲田 1階エントランスホール

主な業務：日本と台湾との友好事業「台湾友好フェス」における運営関係業務

- 会場設営
- リハーサル準備、舞台準備
- 受付・接待
- 観客の会場案内
- 開催関係者、在日台湾人との交流
- 文化（公演）鑑賞
- 交流会での台湾人との情報交換 等

スケジュール：

- 10：00 集合、業務説明、打合わせ
会場設営、リハーサル準備
- 11：00 リハーサル、舞台準備
休憩（昼食）
- 14：00 舞台準備
- 14：30 受付・接待
観客の会場案内
- 15：00 文化（公演）鑑賞
- 16：40 終演、片付け
- 17：00 終了

服装：クールビズ・私服で構わない。

インターンシップに適した私服で参加のこと。

（但し、運営関係者として識別できるよう上衣は白色とし、名札着用とする。）



「台湾友好フェス」のポスター
(2022年度)

2-3 国内代替体験学習プログラム作成に当たっての回顧

プログラムの作成に当たっては、適任者の人選から打診、各機関へ趣旨の説明と協力依頼、日程調整など、学生がグローバルキャリアを考える視点に立ち、何度も関係者と協議を重ねた。そして事前の現地調査をした上でスケジュール調整を図り、フィールドワークにおいては事故防止や感染対策を最優先に引率に当たった。

2-4 国内代替実習を受講した学生の状況

2020年度の履修学生は8名全員が女子（2年生6名、3年生2名は留学生、国籍：中国、マレーシア出身の華僑）、2021年度の履修学生も7名全員が女子（2年

生、うち1名は留学生、国籍：中国）、2022年度の履修学生は8名（2年生男子4名、2年生女子3名、4年生女子1名、うち2、4年生女子3名が留学生、国籍：中国）であった。選考に国籍は一切関係なく、留学生については授業内で学生が自己紹介したことにより知り得たものである¹¹。

次に、2020～2022年度の学生たちの特徴と傾向をまとめる。

2020年度の学生は、初回からオンライン授業となり、誰もが不慣れなZoomを接続し真剣なまなざしであった。2名は一時帰国したまま日本に再入国できず、祖国から参加した留学生で共に通信環境が悪くビデオの顔出しは難しい状況であった。

学生たちの応募理由は、「以前から台湾にエントリーしようと決めていた。」「台湾に行けなくても台湾を知りたい。」等と意欲的で、「感染拡大を抑え込んだ台湾の状況をリアルに知りたい、台湾を知るチャンスだ。」等、授業への関心の高さを見ることができた。この年度の学生たちは、コロナ禍前の高校・大学生活を送ってきており、「台湾に行ったことがある。」「ホームステイや海外旅行の経験がある。」など、留学生を含めこれまでの経歴にグローバルなキャリアを考える機会がある学生が多かった。中国語話者の留学生2人は、台湾の学生との交流では通訳をし、授業内の中国語学習ではモデル発音や対話で練習相手になるなど、郭講師を補佐する役を担った。また、学生交流や報告書・ポスター製作などでは各々が時間調整し、オンライン打合わせは台湾やマレーシアとの時差から深夜に及ぶこともあった。マレーシアの学生は「実家の通信環境が整っていなかったのでコンピューターの組み立てから始まった。部品の多くが台湾製で、台湾のIT企業に興味を持った。」と振り返った。この学生は、年度内に再入国許可が下りず、他の学生と一度も顔も合わせずに合評会を迎えた。チームメイトから「顔が見たい、会いたい」と切望され、送ってきた「笑顔の写真」がプロジェクターに映し出されると、全員で感動の「出会い」になったことを紹介しておきたい。

2021年度の学生は、入学以来、一度も大学に登校したことのない学年であった。Zoom操作は慣れていたが、対面授業となったアクリル板の施された教室で「出会う」体験は緊張した様子も見られた。マスクで隠れ表情が分からず、声も小さくて聞こえなかった。しかし、プログラム全体を振り返ると、行動制限レベルに翻弄されたものの、一つのチーム・仲間となって、校外フィールドワークの計

画や報告書・ポスター製作など、学生が自ら任務分担し、役割に沿って発信・共有し、誰もがリーダーシップを発揮し目標達成につながった。

2022 年度の学生は、ほとんどが高校 3 年生の時からコロナ禍のオンライン授業を経験していた。国内代替実習も 3 年目となり、初期段階から台湾人とのオンライン交流を行った。しかし、受講生 8 名は、授業初頭で「自分是人見知りだ」「コロナ禍で何も経験していない」と自己紹介するなど、中国人留学生を含めた全員の自己肯定感が低いことが分かった。教員の質問に反応がなく消極的であったが、毎週、個別の課題をこなし全員の前でプレゼンする体験を重ねながら、「継続は力なり」を実践した。また中国人留学生が中国語の対話練習や台湾の人との交流で通訳をすることで、人見知り同士が打ち解け助け合う機会が多くあった。中国語を学習していなかった学生も、「你好」「謝謝」など習った中国語を使ってみる、その体験から、中国語話者と向き合うことに抵抗がなくなり新しい自分の発見につながった。その結果、「台湾友好フェス」や横浜中華学院での交流や異文化体験で、受講生全員が「自分の考えや思いを伝える」姿勢に変化し、多文化共生について華僑の高校生とワークをする際には人見知りの陰は見えなくなっていた。他方、日本語の文章作成に自信のない中国人留学生 3 名がポスター製作に挑み、幾度となく推敲を重ねながら、日本に留学して学んだ台湾のことを日本語で伝えるという実効ある作品となった。

3. 再開した海外現地体験学習について

3-1 2023 年度の海外現地体験学習

春学期・事前指導の中では、①地理・歴史、社会・文化、政治・経済、台湾人のアイデンティティなど台湾事情の学習と中国語学習、現地体験学習に向けた資料「体験学習のしおり」を作成した。そして②海外現地体験学習では、2023 年 8 月 17 日から 25 日までの 11 日間の日程で (1) 元智大学との学生交流 (2) 法政校友会会員との意見交換会 (3) 台南・台中フィールドワーク (4) 企業インターンシップ、成果報告会という 4 つの活動のもと体験学習が行われた。秋学期・事後指導では、「体験の言語化」として③ポスター・報告書を作成し、台湾についての理解がいかに深まったのか、台湾の人々と積極的に交流ができたのか、多文化共生の態度をどのくらい醸成できたのかを把握した。

春学期の事前指導の中では、台湾の中原大学、実践大学の学生や台湾校友会の先輩が来学した際に交流し、海外現地体験学習に向け意欲を高めた。その他、2019年度参加の先輩たちが出発前の授業に参加し、渡台前のアドバイスや質疑応答などを行った。

11日間の海外現地体験学習の日程は以下のとおりで、4つの活動は日程に沿って次に述べる。

日 程

	場所	活動内容	ねらい
1日目 8/17 (木)	東京台北	成田空港→桃園空港→元智大学 ・大学寮（泊）	
2日目 8/18 (金)	台北 元智大学	13:30-14:50 オリエンテーション 15:00-18:00 元智大学学生との交流 18:30-20:30 元智大学による歓迎会	・体験学習の目的を確認し、安全で有意義に体験学習を進める見通しをもつ。 ・元智大学の大学生や教員と交流し、体験学習のめあてについて、台湾の学生とグループワークを行った。 ・食事をしながら交流を深めた。
3日目 8/19 (土)	台北市	午前-15:00 元智大学学生と台北市街の歴史や文化を探索 15:00-17:30 台湾法政校友会会員へのインタビュー（5名） 18:00-20:00 企業関係者・校友会役員等との顔合わせ・交流会 ・大学寮（泊）	・台湾の学生とともに台北市街を巡り、歴史・文化の理解を深めた。 ・台湾校友会会員のライフヒストリーを聞き取り、異なる文化での経験がキャリア形成に及ぼす影響について考えた。 呂：貿易／製造、陳：勸儀科技、陳：山櫻木材／土地開発、福地：俳優、三浦：大学院生 ・台湾校友会の方々とは交流するとともに、インターン先の企業の方と顔合わせを行った。
4日目 8/20 (日)	台北→台南	午前 12:00-14:00 ・烏山頭ダム 八田興一記念館	・バス移動 ・日本人母をもつ鄭成功、教科書に載る八田興一の史跡を訪れ、記念館で展示と動画をみた。

		・延平郡王府（鄭成功） ・安平古堡（ゼーランドディア城） ・家新大飯店（泊） ・台南花園夜市	・日本とのつながりや台湾の歴史について考えた。 ・自由行動で夜市を訪れた。
5 日目 8/21 (月)	台南 台中	9:30-10:30 ・企業訪問（台南） 仁蘭園 12:00-14:00 ・企業訪問（台中） 台塑企業 ・富信大飯店（泊）	・台湾と日本で協力して蘭の栽培や国際的な流通を担う企業を対象に、グローバル社会のキャリアの事例を知った。 ・国際的な企業戦略、日本との関係、グローバル化の進むキャリアの事例について知った。
6 日目 8/22 (火)	台中 台北	9:30- ・企業訪問（台中） 三信商業銀行 14:30- ・科学園区探索館 ・大学寮（泊）	・企業を見学するとともに、法政校友会会長廖松岳頭取のライフヒストリーについて聞き取りをした。 ・サンエンスパークにおいて、半導体メーカーの企業戦略などについて、展示を見ながら説明を聞いた。
7 日目 8/23 (水)	台北	台北での企業等インターンシップ 1 日目 ・大学寮（泊）	台北での企業でインターンシップに課題をもって意欲的に参加する。 ・日立先端科技股份有限公司 ・遊学台湾 ・東北ジャパンネットワーク ・凌巨科技股份有限公司 ・台灣瀧澤科技股份有限公司 ・弁護士法人プロテクトスタンス趨勢法律事務所
8 日目 8/24 (木)	台北	台北での企業等インターンシップ 2 日目 ・大学寮（泊）	同 上
9 日目 8/25 (金)	台北	大学生とのキャリアデザインの意見交換、振り返り、成果報告の準備 ・大学寮（泊）	・元智大学大学生とディスカッションを行い、キャリア観や就労意識の違いを検討し合う。体験学習を振り返り、成果報告の準備をする。
10 日目 8/26 (土)	台北	18:00-20:30 成果報告・意見交換会 教員、学生、企業、校友会 ・大学寮（泊）	・成果報告の準備 ・体験学習の成果を報告し意見交換を行い今後の課題を整理するとともに、感謝の気持ちを表す。

11 日目 8/27 (日)	台北 東京	元智大学→桃園空港→成 田空港	
----------------------	----------	--------------------	--

3-2 4つの活動を展開した海外現地体験学習

海外現地体験学習は、「元智大学との学生交流」「法政校友会会員との意見交換会」「台南・台中フィールドワーク」「企業インターンシップ、成果報告会」の4つの活動に大別できる。

3-2-1 元智大学との学生交流

桃園空港で元智大学の学生の出迎えを受け、同大学内の学生寮にて、応用外国語学科日本語コースのパディ4名（男子1名、女子3名）と約4人1部屋に分かれて寮生活をした。台湾は外食文化のため、学生たちは広大なキャンパス内を徒歩にて近隣飲食店やコンビニまで行き、在来線の駅を利用しながら台北市周辺で充実した日々を過ごした。台湾の大学生はバイクを利用するのが一般的だが、この期間のパディは日本の学生に合わせ徒歩で案内し、寮生活全般と台南・台中フィールドワークにも同行し学生同士の交流を深めた。

元智大学での2日目は、応用外国語学科の呉翠華先生の講話を聞き、本実習の目的を明確にするため両校の学生によるグループワークを行った。歓迎会では、食事をしながら大学生や教員と交流した。

3-2-2 法政校友会との意見交換会

3日目は、台北市内の淡江大学で、台湾校友会の方々のライフヒストリーを聞き、意見交換会を通し、異なる文化での経験がキャリア形成に及ぼす影響について考えた。ご協力いただいた方々は、呂銀坤氏（ネジや部品の製造・貿易会社／製造業）、陳晴裕氏（住宅設備部品の製造会社／製造業）、陳 侑材氏（山櫻木材／土地開発）、福地祐介氏（俳優）、三浦直矢氏（大学院生）で、その後は校友会会員やインターンシップ先の企業の方と合同で顔合わせ会を行った。

3-2-3 台南・台中フィールドワーク

4～6 日目までの 2 泊 3 日はバスで移動し台南・台中フィールドワークを行った。

4 日目は、春学期事前指導で学んだ台湾の史跡、日本人母をもつ鄭成功の祀られた延平郡王府や安平古堡（ゼーランディア城）、日本人技術者八田與一の功績を残す烏山頭ダムや記念館を見学し、日本とのつながりや台湾の歴史について考えた。夜の自由行動では台南最大の花園夜市などを訪れた。

5 日目は、台南の気候を利用し、蘭の栽培や国際的な流通を担う日本人起業家茂木仁氏の「仁蘭園」を訪問し、アジア各国の出稼ぎ労働者の雇用について説明を受けた。その後、台湾を代表する台塑企業（台湾プラスチックグループ）において、プロモーションビデオを見ながら国際的な企業戦略、日本との関係について知見を得た。

6 日目は、台中市に所在する地域経済に根ざした三信商業銀行を見学し、法政校友会会長である廖松岳董事長（頭取）のライフヒストリーについて聞き取り、銀行員の働き方など質疑応答と意見交換を行った。その後、TSMC が所在するサンエンスパークにおいて、科学園区探索館の展示を見ながら半導体メーカーの企業戦略などについて説明を聞いた。



三信商業銀行を訪問（2023 年度）

3-2-4 企業インターンシップ、成果報告会

7～8日目は、台北市およびその近郊で、各々が台湾企業6社のインターンシップに課題をもって意欲的に参加した。学生は、学生寮から最寄りの内壠駅まで徒歩で移動し、在来線の台湾鐵道や捷運（MRT：地下鉄）などの公共交通を利用して出勤し、企業担当者が作成した2日間のスケジュールに沿って、会社見学、ミーティング、営業活動、社員との交流などのさまざまな実習を行った。インターンシップ先は学生の希望により割り当てられた。受入れ学生数、会社概要、担当者、学生の感想は以下のとおりである。

・日立先端科技股份有限公司（日立ハイテク）（男女学生2名）

【会社概要】

台湾日立ハイテクは創立53年目、社員数は約360名で、主に半導体業務などの自社部門と電子材料の販売等を行う商事部門を展開している。半導体製造の最先端としてSDGsなどの環境保護にも力を入れている。担当者は陳政方協理以下2名。

【参加した学生の感想】

台湾は大概の学生が大学院まで進学するため専門性の高い勉強ができる。キャリア観の違いを感じた。「学力は過去の話。学習力は競争力の話。」生涯学び続けることで戦力になれることを学び、グローバルな視点でキャリアを考え、常に目標を掲げ挑戦し自分だけでなく周りにも影響を与えられる人材になりたいと思った。（2023年度学生A）

・遊学台湾（男子学生1名）

【会社概要】

業務4年目の台湾留学サポート会社で、語学留学とワーキングホリデーの二つに分けられる。担当者は茂木仁社長（企業訪問した「仁蘭園」の経営者）。

【参加した学生の感想】

日頃から見ているさまざまなホームページも、多くの苦労のもとにできていることを実感した。自分で足を運び取材し、それをもとに作成する作業は、隅々まで取材して解像度を上げることができた。国際的企業で働く難しさは、さまざまな価値観を受け入れビジネスとして発展していくことで、学生のうちから多様な価値観に慣れておくことが必要と感じた。（2023年度学生

B)

・東北ジャパンネットワーク（女子学生 2 名）

【会社概要】

2010 年創立「日本と海外をつなぐサポート」行い、事業内容はインバウンド支援、海外進出支援、貿易支援等が挙げられ「寄り添いが企業を発展させる」という理念でクライアントファーストのサービスを提供している。担当者は林雪娥総経理以下 2 名。

【参加した学生の感想】

誰にでも give の精神を忘れない、名刺交換で名前をしっかり覚え、笑顔で接する姿がとても印象的であった。さまざまな人々と出会う中で、それぞれが異なるバックグラウンドや経験を持っている。時間をかけ相手を理解し関係を築き上げていくことが重要だと感じた。（2023 年度学生 C）

・凌巨科技股份有限公司（女子学生 2 名）

【会社概要】

1997 年に創立、2017 年に凸版印刷の子会社となった。現在は自動車や産業機器、電子機器などの分野の顧客をターゲットに、液晶ディスプレイ、タッチパネル等の研究・開発・製造・販売を行っている。担当者は中村浩司総経理以下 4 名。

【参加した学生の感想】

台湾では「転職はキャリアアップのための手段」で 3～5 年ほどで転職をする人が多く、就職時には性格診断が行われる。日本人駐在員の話から「文化＝価値観」ということを理解し海外の人と向き合う大切さを学んだ。さまざまな方にインタビューし、人の数だけキャリアがあり自分の中でキャリアの軸となるものを見つけることが重要だと実感した。（2023 年度学生 D）

・台湾瀧澤科技股份有限公司（男女学生 2 名）

【会社概要】

1971 年に設立し 2003 年に正式上場、従業員数は台湾に 320 名を擁する企業である。さまざまな機械のパーツや部品を工作し機械自体も自社製品として製造している。担当者は瀧澤修三董事長。

【参加した学生の感想】

日本人が海外でキャリア形成していく難しさや、やりがい等を学んだ。また、台湾の方々の「人脈を広げつつ働く」というキャリア形成の仕方を学び、キャリアデザインを客観的かつ多角的に捉えることができた。（2023 年度学生 E）

・ 弁護士法人プロテクトスタンス趨勢法律事務所（女子学生 1 名）

【会社概要】

台湾及び日本、アジア圏内において活躍する法律事務所で、労働訴訟や刑事事件などの訴状案件、会社設立、投資相談などのビジネスに関する案件、渉外案件、企業・個人に対する信用調査のサポートなどがある。担当は徐崧博（弁護士）。

【参加した学生の感想】

裁判所見学では大きな刺激を受けた。言語が分からず、その場の雰囲気、話し手や聞き手の表情、想像で読み取った。通訳を解さず分かりたいと強く感じた。また互いの文化を理解し相手を思いやる気持ち、チームワークや情報共有の大切さなどを学んだ。（2023 年度学生 F）

9 日目は、元智大学の学生とキャリア観や就労意識の違いを検討し合い、体験学習を振り返りながら成果報告会の準備を行った。

10 日目は体験学習の最終日となり、お世話になった方々やインターンシップ先企業の担当者に向けて、成果報告・意見交換会が行われた。学生たちは体験学習の成果を報告して意見交換をし、今後の課題を整理するとともに、関係者の皆様に感謝の気持ちを表した。

3-3 海外現地体験学習プログラムの作成に当たったの回顧

海外現地体験学習が再開されたとはいえ、2019 年当時のインターンシップ受入れ企業は担当者が代わり、4 年ぶりとなるスケジュール作成には苦労が伴った。計画のほとんどは一からのやり直しとなり協力企業の開拓から始まった。日本台湾教育センター台湾事務所の徐聖芬氏、授業担当の郭講師、台湾校友会の方々、そしてこれまで関わってくださった日本人駐在員など、実に多くの関係者が築いてきたキャリアの人脈を繋いでくださり、企業訪問を含めた以下の 9 社からご協

力をいただくことができた。

何度も協議を重ね、いわゆる1DAY型インターンシップのような会社見学のみに終わらせないスケジュールの作成に努めた。2019年度の5日間の日程を参考に短縮する形で、台湾企業担当者のライフヒストリーを聞き取り、雇用状況や働き方、働いている人々と交流し、キャリアデザインについて考える内容を検討した。

2023年度キャリア体験（国際）台湾 現地体験学習協力企業

	企 業 名	受入学生数
1	仁蘭園	10
2	台塑企業（台湾塑膠工業股份有限公司）	10
3	三信商業銀行	10
4	日立先端科技股份有限公司（日立ハイテク）	2
5	遊学台湾	1
6	東北ジャパンネットワーク	2
7	凌巨科技股份有限公司（ジャイアントプラス） （凸版印刷株式会社の台湾子会社）TOPPAN INC.	2
8	台湾瀧澤科技股份有限公司	2
9	弁護士法人プロテクトスタンス趨勢法律事務所	1

（注：1～3は台南・台中での企業訪問先、4～9はインターンシップ先の企業）

凌巨科技股份有限公司（ジャイアントプラス）インターンシップスケジュール

1日目	実習内容
8:30	出社
9:00	会社紹介ビデオ視聴・工場見学
10:30	各部門の機能理解
12:00	昼休み
13:00	人事の方にキャリアインタビュー
15:00	会議の見学
17:30	終業

2日目	実習内容
8:30	出社
9:00	前日の報告
9:30	研究開発、マーケティング、営業等の説明
12:00	昼休み
13:00	工場見学、労働安全の視察に随行 雇用情勢や社員の働き方などについて質疑
15:00	振り返り、課題の記入、質疑応答、意見交換など
17:30	終業

なお、以下にインターンシップスケジュールの一例を挙げている。

3-4 海外現地体験学習に参加した学生の状況

2023年度の履修学生の特徴と傾向をまとめる。

参加条件に、渡航先のビザ取得が可能であることを確認させたことで中国人留学生の応募はなく、他の国籍の留学生もいなかった。受講者は全員2年生で、男子学生3名、女子学生7名で全員が日本国籍であった。授業当初は全員がマスクを着用していたが、8月の体験学習の際は、航空機搭乗以外は着用していなかった。

応募動機をみると、「高校の修学旅行は台湾の予定だったが行けなかった。」「感染対策ばかりで物足りない。」「海外に行ったことがなく、日本を飛び出したい。」「など、コロナ禍の高校生時代に修学旅行等の学校行事を経験できなかった学生特有の応募理由が目立った。次に、「日本と異なる台湾の生活や文化に興味がある」「台湾のジェンダー平等になどを知り、日本と違う新しい視点を得たい。」など、台湾への特別な思いが表れた理由もあった。なお、参加した学生の約半数は「初めての海外渡航」と答えている。

渡航手続きは、早期の段階から学務担当者とキャリアアドバイザーが、パスポート申請、保険加入等について学生に情報提供し、航空運賃の変動を見ながら学務が一括して航空券を購入した。現地でのスケジュールは、業務委託した日本台湾教育センターの担当者と協議し、調整を繰り返した。海外でのスマートフォンの使用方法、外貨両替などは、学生が自ら調べ、責任をもって現地で使えるように促した。学生たちは、出発が近づくと積極的に海外注意事項、SIMカードやeSIMなどスマートフォン対策を調べ、デビットカードやクレジットカードの手続きを進め、11日間の海外現地体験学習に臨んだ。

「百聞は一見に如かず」のとおり、台湾の直下型の日差し、台南台中の豊穡、南シナ海を見晴らす広大なフォルモサの工業地帯、繁体字の看板や建物が轟めき、才気煥発な人々が行き交う台湾の街が、学生たちの五感に与えた衝撃は非常に強かった。台湾の大学生は、母語の中国語、台湾語のほか英語を話すことができ、本名以外にイングリッシュネーム（ニックネーム）を持つほど言語の習得に積極的であった。それに対し、日本の学生は自己紹介程度しか話せず、自らの中国語力を試し台湾人の中に溶け込もうとする学生がいなかった。インターンシップに

おいても、ヒアリングやコミュニケーションをとる際には日本語を話せる人、自分と共通する人を頼っていたことは残念だ。それでも11日の実習期間中には、未熟な中国語力を駆使して買い物をし、料理を注文する経験をして度胸がついたことだろう。なお、翻訳機能アプリを入れたスマートフォンは彼らの必需品であった。

台湾では、大学生はしっかりと勉強し、専門的探求のため大学院に進学する割合も高く、一般的に台湾の学生の就職活動は大学卒業後に行う習慣が定着している。それを知った学生たちから「日本では新卒重視、海外では転職は当たり前。生涯学び続け、挑戦することの大切さを知った」「キャリア観の違いを感じた。」という声が多く聞かれた。

ともあれ、渡航期間中、学生全員が病気や怪我、事故や災害等の影響なく体験学習を行うことができた。学生寮やインターンシップ先での体験や法政校友会や台湾で出会った人々の熱いメッセージから、改めて「キャリア」を考える機会を得て飛躍することができた。

4. プログラムを通しての考察

4-1 国内代替体験学習と海外現地体験学習

国内代替体験学習と海外現地体験学習という2つのタイプの体験学習を比較し、共通点や相違点を分析し、国内代替体験学習でできたことを検討するとともに、このプログラムにおいてグローバル人材に必要な要素をどの程度培うことができたのかを考察する。

4-1-1 共通点

2つのタイプの体験学習の共通点には、以下の3点が認められた。

- ・学生の成長が見られた。

授業開始直後の学生の認識は、「台湾で芒果やタピオカミルクティが食べたい。」というレベルであったが、「体験学習によって、日本との関係や台湾との文化の違いを深く知ることができた。」とグローバルな視野を持つ感想に変わった。

- ・言語習得の必要性を感じた。

台湾の学生との交流に触発され、英語や中国語等の外国語の習得に必要性を感じ、語学学習に前向きになった。

- ・国際的な視点が持てるようになった。

体験学習を通して国際的な視野を持つようになり、プログラム履修後や卒業後に海外留学やワーキングホリデーに参加した学生が全体の約4割近く¹²にのぼっている。

4-1-2 相違点

2つのタイプの体験学習の相違点には、以下の5点が認められた。

- ・受講人数に差が生じた。

国内代替体験学習の受講人数は定員に達せず、現地に行けないことで希望者が少なかったと推察される。

- ・応募動機に違いが見られた。

国内代替体験学習を応募した学生は、「例えば台湾に行けなくても応募しようと思っていた」「台湾を深く知り、コロナのあと必ず行きたい。」などモチベーションが非常に高かった。また、振り返りの際には「コロナだからできた」こととして、留学生は祖国から、地方の出身者は実家からオンラインに参加し、海外の大学や企業の方々ともリアルタイムで語り合えたことなど、世界的パンデミックという逆境の中で味わったグローバル体験を挙げていた。海外現地体験学習の学生は、コロナの影響で「高校の修学旅行で台湾に行けなかったから。」など、海外へ行くことの希望が多く、初めての海外渡航という学生が多かった。

- ・国内代替体験学習には中国人留学生が参加した。

国内代替体験学習には、中国人留学生が台湾の現地には行けないことを元より承知で履修していた。海外現地体験学習では、台湾渡航のビザ申請が停止していた影響で、中国人留学生の参加はなく、その他の国籍の留学生も希望者はいなかった。しかし、国内代替体験学習に中国人留学生が参加したことで、中国語会話が活発に行われ、同じ学部で学ぶ留学生との交流が深まり、学生同士が触発される効果があった。

- ・体験の本質が違った。

国内代替体験学習は、台湾の関係者の話を聞くことで学生の「想像力」が問われたのに対し、海外現地体験学習では直にその人自身の「真価」が問われた。台湾に行き、見て、聞くというだけならば旅行者と変わらないといっても過言ではない。この体験学習の目的が異文化間能力の育成にあり、言葉や文化の違う台湾の人々と接し、何を感じ、どんな行動をしたか、その本質に違いがあった。

海外現地体験学習に参加した学生の一人は

「春学期事前学習でさまざまな台湾事情を学び、現地に行ったくらいの知識を持っていると思っていた。しかし実際に行き、事前に得たものと、現地の雰囲気や人柄、街並み、文化など、かなりギャップがあることを肌で感じた。この授業を通し、実際に行って体験する大切さを学んだ。」(2023 年度学生 G)

と感想を述べた。この鮮やかな語りに現れているように、海外現地体験学習は、想像力をはるかに超えるダイナミックな体験であったと史料される。

・ 受講年度による相違があった。

この科目の履修対象は 2 年生以上で 20 歳前後の学生が多いが、2020～2023 年度の 4 年間で、受講生に共通する「年度ごとの相違」があった。

2020 年度の学生は、大学 1 年までの学生生活を送った後にコロナの行動制限を経験したため、学生自身のキャリアがある程度形成され、オンライン授業でも活発な意見交換ができた。2021 年度の学生は、大学入学時から登校できず、授業開始時はコミュニケーションをとることが難しい印象もあった。対面授業が始まった 2022 年度の学生にも同様の傾向が見られ、どちらもマスク着用で教員の呼びかけに対する反応が弱く、校外フィールドワークの際も行動制限の影響で会話も少なく、辛うじて打ち解け合った様子であった。それに対し、2023 年度の学生は、対面授業には慣れていたが、高校時代のあらゆる活動が制限された影響なのか、学生は受け身の印象があった。海外現地体験学習に参加した学生は「春学期はマスクしてあまり話をしなかった。暑い台湾でマスクを外し、むしろ帰ってきてからの方がみんなと仲良くなれた。」(2023 年度学生 A) と感想を述べた。もちろん、受講生それぞれに個性があり、それまでの経験や多様な高校生活が影響しているため一概にはいえ

ない。しかし、コロナ禍で人々のコミュニケーションが難しい時期があったことが学生の成長段階に強く影響し、年度ごとの相違として現れた可能性が示唆される。

4-2 2つのタイプの体験学習の考察

まず、国内代替体験学習を振り返ることで、台湾をどこまで理解できたのか、何が課題として残されたのか。学生たちの具体的な感想から考察したい。

「この授業を通し、何を学んだか。台湾のイメージがどう変わったのか。自身のキャリアデザインについて考えがどのように深まったのか。」という質問に対し、国内代替体験学習を受講した学生が次のような感想を述べている。

「最初は、台湾の食べ物や観光地という浅い知識しかなかった。台湾に行けなかったのは残念だが、課題を調べ、ゲストの話を聞き、オンライン交流や国内のフィールドワークから、台湾人のアイデンティティ、日本との文化の違いを学んだ。またコロナへの迅速な対応、LGBTQ の理解、女性の社会進出など、台湾を深く知ることができた。驚きと楽しみがいっぱいだった。」(2021年度学生 A)

この学生のように、ほぼ全員が「イメージが変わった、国内代替体験学習で台湾を深く知ることができた。」と語った。台湾の現地を訪れることはできなかったが、コロナ禍だからこそできたこともあり、オンラインと対面とを組み合わせ、台湾の元智大学や台湾校友会との交流、台湾企業のインターンシップ、そして東京・横浜フィールドワークや「台湾友好フェス」インターンシップに参加し台湾への理解を深めることができた点で、その効果は評価されるであろう。

しかし、台湾の現地に行くことができなかったため、台湾の関係者ひとりひとりの話を聞き、台湾がどのようなところなのか、学生たちが具体的にどう受け止めたのか、彼らに問われる真価は「想像力」であった点で、現地を知ったとはいえず、課題が残された。

それに対し、海外現地体験学習に参加した学生たちは、

「台湾の人が共通して「動かなければ何も始まらない」「やりたいことはとりあえず挑戦してみた方がいい」と言った。お店の人や台湾の学生に勇気を出して話してみたら不安が解消された。」(2023年度学生 H)

「初めての海外でチャレンジングな状況が多く、それを乗り越えることで自分に自信を持つことができた。異文化に触れ自分の考え方を客観的に見ることができるようになった。」(2023年度学生I)

「中国語を少しでも活用しようと意気込んでいたが、挨拶レベルしかできなかった。現地の言葉で話すことができればもっと深く理解することができたのではないかと、不甲斐なさを実感した。」(2023年度学生C)

という具体的な体験の感想を述べている。海外現地体験学習が学生に与える実体験にはインパクトがあり、その効果は計り知れないほど大きいことが分かる。

4-3 グローバルキャリアで求められる資質能力

国内代替体験学習と海外現地体験学習という2つのタイプの体験学習を通し、グローバル人材に必要な要素をどの程度培うことができたのか。グローバル人材の視点を①語学力・コミュニケーション力、②主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性と柔軟性、責任感・使命感、③異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティの理解という3つの要素に焦点を当て分析したい。

① 語学力・コミュニケーション力

語学力はコミュニケーション力の重要な構成要素である。2つのタイプの体験学習では、異文化・多文化間コミュニケーションにおける学生ひとりひとりの資質と努力に因ることが大きかった。特に、語学力は環境に大きく影響され、海外現地体験学習では身振り手振りで「相手に伝えたい」気持ちや態度が強く求められた。国内代替体験学習では、中国人留学生との会話練習や横浜中華学院での多文化共生の交流により、同様の効果が見られた。

② 主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性と柔軟性、責任感・使命感

グローバル人材は、グローバル社会の中でさまざまな障害を乗り越え、臨機応変に対応する姿勢が求められる。2つのタイプの体験学習では、どちらも課題やプレゼン、フィールドワークやインターンシップなどの実体験を通し、学生が主体的、積極的にチャレンジすることができた。また、グループワークやポスター・報告書製作を通し、協調性と柔軟性、責任感・使命感が育まれた。

③ 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティの理解

グローバル人材は、それぞれのアイデンティティをバネに、異文化のもとで日本の国内外で柔軟な異文化対応ができ、何らかの価値を生み出そうと動くことが求められる。ここで注目したいのは、国内代替体験学習に参加した中国人留学生の感想である。

「私は中国人であるにも関わらず台湾について何も知らなかった。台湾人の先生が親切で、台湾をさまざまな角度から学び、台湾の学生と交流し台湾のイメージが、ややマイナスの印象からガラッと変わった。日本と台湾と中国の関係は政治的に良くないイメージが湧き、その間にいる留学生の自分はとても残念だ。国という前に、我々はまず人間であって、それぞれの地域、文化、異なる環境の人々のアイデンティティを尊重しなければならない。それらと向き合うことが何より大事で優先すべきだ。台湾だけでなく、グローバル時代に世界に目を向け、他の国をより深く知るべきだと思った。」（2022 年度学生 C）

この留学生の言葉に象徴されるように、国内代替体験学習で、日本の国内外に住むグローバルなキャリアを持ち備えた台湾の関係者との交流によって、多文化共生への知見が深まったことは大いに評価される。

また、海外現地体験学習で、台湾企業へのインターンシップに参加した学生は、

「日本人駐在員から「文化＝価値観」ということを理解し海外の人と向き合う大切さを学んだ。さまざまな方にインタビューし、人の数だけキャリアがあり自分の中でキャリアの軸となるものを見つけることが重要だと実感した。」（2023 年度学生 D）

「言葉と文化の違う人と一緒に働くことの難しさを感じた。」（2023 年度学生 J）

などと感想を述べている。自分の中のキャリアの軸やアイデンティティの理解を得たかどうかを評価するのは難しいが、台湾の人々の異文化に向き合おうと努力した姿が窺える。

このように、どちらの体験学習においても参加した学生がこれまでの認識や思い込みから離れ、グローバルな視点に立ってキャリアを理解しようとし

たことは高く評価できる。

4-4 成果と課題

これまで述べてきた2つのタイプの体験学習の違いが、台湾を通してグローバルなキャリアを考える学生にどのように影響したかを分析した。どちらのタイプも、学生の成長が見られ、体験学習によって台湾を深く知りグローバルな視野を持つことができ、学生自身のその後に続くキャリアに活かされることが期待された。

国内代替体験学習を受講した学生は、台湾には行けなかったが、コロナ禍だからこそできたことも多々あったと思われる。日本の国内外に住むグローバルキャリアを持ち備えた台湾の関係者との交流によって知見が深まったことや、東京・横浜フィールドワークや「台湾友好フェス」インターンシップに参加し、台湾人だけでなく、中国人や華僑など多文化共生への理解を深めることができたことは大いに評価できる。

しかし、海外現地体験学習で学生が目当たりにした実体験のインパクトは大きい。国内代替体験学習は、話を聞き「想像力」を働かせることで異文化を理解することに一定の効果はあったが、台湾の現地で体験するような五感で味わう刺激が少なかったことが課題として残された。

このプログラムをさらに発展させるために、国内代替体験学習と海外現地体験学習を関連付け、可能であれば、台湾現地での体験だけでなく国内フィールドワークのような日本国内での多文化理解の両方を組み合わせることが肝要である。

おわりに

本稿では、キャリア体験学習（国際・台湾）の国内代替体験学習と海外現地体験学習を中心に、グローバルなキャリアを考える学生にどのように影響したか検討してきた。

どちらの学生も、授業と体験学習を通して台湾を深く知ることができた。台湾の現地を訪れることはできなかった国内代替体験学習は、コロナ禍だからこそできたこともあり、オンラインと対面の授業を組み合わせ、日本国内フィールドワークや「台湾友好フェス」インターンシップに参加することで台湾への理解を

深めることができていた。また、日本国内での異文化理解や多文化共生について考察する上で効果があった。一方で、台湾現地の活動では、台湾の学生と直に交流し、現地の企業でインターンシップを行うなど思いがけない出会いで刺激を受けるといったダイナミックな体験ができ、学生自身の新たな気づきにより視野の広がりがあった。

以上、キャリア体験学習（国際・台湾）の2つのタイプの体験学習を比較して考察した結果、国内代替体験学習よりも海外現地体験学習における効果が途轍もなく大きいことが明らかとなった。また、この体験学習では、日本と関係の深い台湾を通し、学生はグローバル人材となる要素を十分に培うことができ、学生自身のその後続くキャリアに活かされていることもわかった。

今後、このプログラムをさらに発展させるためには、台湾現地での体験だけでなく、国内フィールドワークのような日本国内での多文化理解の機会を得る体験もあらかじめ取り入れ、さらによりプログラムをデザインできるよう検討していくことが求められる。

謝辞

プログラムの作成に当たって、台湾の方々や多くの関係者にご協力をいただいた。これらは日本台湾教育センターの徐聖芬氏、郭艷娜講師の信望と人脈によるものである。また、国内代替体験学習では、台湾出身のNPO 法人華文会会長原里美氏に一方ならぬお世話になった。ご協力をいただいた皆様に心より感謝申し上げたい。

参考文献

- 松尾知明（2020）「異文化間能力とグローバル体験学習プログラム——キャリア体験学習（国際・台湾）を事例として——」『生涯学習とキャリアデザイン』Vol. 18 No. 2
2020 年度法政大学キャリアデザイン学会紀要
- 友松篤信（2012）『グローバルキャリア教育——グローバル人材の育成』ナカニシヤ出版
- 2020 年度キャリア体験学習（国際・台湾）報告書「リモート de 台湾 ～2020 年からできたこと～」
- 2021 年度キャリア体験学習（国際・台湾）報告書「台湾を知った1年間——キャリア体験学習を通して学んだこと——」
- 2022 年度キャリア体験学習（国際・台湾）報告書「Now is the time to go to Taiwan!

～コロナに打ち勝つ活気を～

2023 年度キャリア体験学習（国際・台湾）報告書「きっとあなたも行きたくなる私たちが見た台湾」

2023 年度キャリア体験学習（国際・台湾）しおり「台湾の歩き方～知見を広げよう私たちの 11 日間～2023 キャリア体験学習台湾しおり」

注

- 1 法政大学シラバス「キャリア体験学習（国際）／松尾知明、郭艶娜」参照。
- 2 厚生労働省ホームページ、感染症の予防および感染症の患者に対する医療に関する法律により基本的感染対策の考え方が変更になった。（令和 5 年 4 月 27 日発表。）
<https://www.mhlw.go.jp/stf/corona5rui.html>（2024 年 1 月 3 日、最終閲覧）
- 3 友松篤信（2012）『グローバルキャリア教育——グローバル人材の育成』ナカニシヤ出版 p. 4
- 4 産業人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会（2010）報告書「産学官でグローバル人材の育成を」p. 31
- 5 文部科学省「グローバル人材の育成について」2023 年 12 月 22 日 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/_icsFiles/afieldfile/2012/02/14/1316067_01.pdf（2024 年 1 月 3 日、最終閲覧）
- 6 「法政大学キャリアデザイン学部オーラルヒストリー（1）——歴代学部長・初代事務主任座談会——」『法政大学キャリアデザイン学部紀要第 20 号』pp. 175-176
- 7 松尾知明（2020）「異文化間能力とグローバル体験学習プログラム——キャリア体験学習（国際・台湾）を事例として——」『生涯学習とキャリアデザイン』Vol. 18 No. 2 2020 年度法政大学キャリアデザイン学会紀要 pp. 3-14
- 8 日本台湾教育センターは、日本の文部科学省にあたる台湾教育部が、日本に台湾の高等教育を広め学術交流を深めることを目的として 2012 年に設立。（所在地は東京都千代田区富士見 2-17-1 法政大学内）
- 9 2018～2019 年度は笹川孝一教授と趙宏偉教授、2020 年度は笹川孝一教授と松尾知明教授、2021 年度からは松尾知明教授が担当している。
- 10 新型コロナウイルス対応の特別措置法に基づき、2020 年 4 月 7 日に東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の 7 都府県に緊急事態宣言が発出され、4 月 16 日には全国に拡大された。
- 11 2023 年度の参加条件は「体験型選択必修科目ガイダンス資料」に、渡航先のビザの取得が可能であることと明記している。
- 12 郭艶娜講師が 2018 年度以降の本プログラム履修者に対し行った追跡調査による。

ABSTRACT

Global Career Considerations through Career Experience Learning (International・Taiwan)

**— Alternative Experience Learning within Japan
and Taiwan Experience Learning (2020～2023) —**

Yuko KURIYAMA

The purpose of this paper is to document the practices and transformation of students in two types of experiential learning: an alternative learning experience in Japan and a field experience in Taiwan. These experiences took place in the aftermath of the COVID-19 infection, aiming to explore students' understanding of global careers.

In relation to global careers, we focused on three key elements, as outlined in the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology's 'On Developing Global Human Resources': 1) language and communication skills; 2) initiative, positivity, challenging spirit, cooperation, flexibility, sense of responsibility, and mission; and 3) understanding of different cultures and identity as a Japanese.

A comparative analysis assessed the extent to which students cultivated these essential elements for global human resources in the two learning experiences: domestic alternative experiential learning and local experiential learning in Taiwan.

In both types, participating students gained insights into Taiwan through experiential learning. The alternative experiential learning in Japan deepened their understanding of Taiwan through online classes, fieldwork in Japan, and

participation in the Taiwan Friendship Fest internship, fostering cross-cultural understanding and multicultural conviviality within Japan. Conversely, the local experience in Taiwan broadened students' perspectives through activities like exchanges with Taiwanese students and internships at companies.

Comparing the two types of experiential learning revealed that local experience learning in Taiwan was significantly more effective than domestic alternative training.

This career experience learning program (International・Taiwan) enabled students to fully cultivate the elements necessary to become global human resources, benefiting their subsequent careers. For the program's future development, it would be desirable to offer students opportunities to understand multiculturalism not only through the local experience in Taiwan but also by conducting fieldwork in Japan."